

未来今昔物語

物質
転送
装置

【未来今昔物語】シリーズ

人力発電所の真実 <http://p.booklog.jp/book/98813>

リアル戦争ごっこ <http://p.booklog.jp/book/99475>

拙作『牛と異星のアルダムラ』も
当サイトで公開しております。

縦書き（画像版）版

<http://p.booklog.jp/series/detail/1565>

横書き（テキスト）版

<http://p.booklog.jp/series/detail/1535>

未来今昔物語

物質転送装置

今は昔、データ通信が始まった時代から一〇〇〇年。物質転送装置の実現は、いまだ人類の夢であった――。

しかし、とある研究所の開発チームでは、物質転送装置の研究において、稼働試験の段階までこぎつけていた。転送実験は順調で、無生物はもちろん、人間以外の生物の転送は全て成功していた。

人間の転送に成功すれば、彼らが直近の目標としていた開発は、ひとまず達成されたことになる。とはいえ、実用化までの道のりはまだまだ長いと、研究チームの誰もが考えていた。

人間の転送実験は、開発責任者である女性研究主任が自ら志願し、被験者になることになっていた。

装置に入る女性主任。周りの研究員は、不安と期待の入り交じった視線を彼女に注いでいる。

装置のスイッチが入った。

送信側の転送装置に入った女性主任は、数十分後、数メートル離れた場所にある受信側の転送装置から出てきた。

研究員たちから、どよめきが上がる。

女性主任の目の前には、いつもと変わらない風景があった。

歓声を上げて出迎える研究員たち。実験は成功である。しかし、女性主任の顔は晴れない。その様子を見て、研究員たちの歓声の勢いが急速に弱まった。

女性主任は、自分を取り囲む研究員をかき分けるようにして、足早に自分の席に向かった。

伝言用のメモを乱暴に引きちぎり、適当な数列を書きなぐる。さらに、引き出しからナイフを取り出して自分

の親指を傷つけた。

一瞬顔をゆがめる女性主任。親指の先に血がにじんだのを確認すると、再び転送装置のところまで来て研究員にスイッチを入れるように指示した。

受信側の転送装置から、無事、女性が出てきた。

ナイフで傷つけた親指を確認する女性。特に変化はない。血がにじんだままだ。小走りで自分の机に駆け寄り、書きなぐったメモを見る。彼女は数列をきちんと覚えていた。

書道の『払い』をしたような血の線が机の天板に付い

た。彼女の親指からにじんでいた血であった。

研究員の何名かが女性の様子を心配して背後から話しかけてきた。

その声に振り返り、事情を説明する女性。転送装置を通ってきた以前の自分と全く同じかどうか、不安でならないという。

背後にいた研究員が女性を落ち着かせようとする。「それは構想の初期段階ですでに提起されていた問題で、実験を何度も重ねることによって、問題ないという証明は完了している。しかも主任自ら納得していたのではない

か」と。しかし、女性主任の表情は晴れない。

女性研究主任が不安を覚えた原因は、自らが中心になつて開発した転送装置の仕組みにあった。

彼女が開発した物質転送装置は、送信側と受信側で構成されている。

送信側に入った物体の構造を素粒子レベルで解析し、受信側にデータを送信。受信側の装置が、その解析データをもとに、物質を組み上げる。同時に送信側に入っていた物体は消去される。

これで、見かけ上は物質が転送したのと同じになる。

彼女は、これを「物質の電子化」と名付け、旧世界のファクスやパソコンのデータに例えて持論を展開していた。つまり、文字や画像、音楽データをゼロとイチの二進数に置き換え、転送し、再現する――。

しかし、あくまでも転送は見かけ上であって、学者たちの議論に決着はついていなかった。彼女は、いち早くそれを証明したかった。

しかし、いざ自分が被験体になってみると、『今いる自分は本当に自分なのか』という不安に襲われる。

理屈ではない。本能的に不安なのである。『今いる自

物質転送装置

分はコピーにすぎないのでは』ないかと。しかし、彼女の考えるオリジナルは、もうない。送信装置が消去してしまっている。

(了)

未来今昔物語【縦組版】物質転送装置

<http://p.booklog.jp/book/99760>

最後までお読みいただきまして誠にありがとうございました。

未来今昔物語【縦組版】リアル戦争ごっこ

<http://p.booklog.jp/book/99475>

未来今昔物語【縦組版】人力発電所の真実

<http://p.booklog.jp/book/98813>

本作のような短編ではありませんが、
この場をお借りして他の作品も紹介させていただきます。

牛と異星のアルダムラ

縦書き（画像版）版

<http://p.booklog.jp/series/detail/1565>

横書き（テキスト）版

<http://p.booklog.jp/series/detail/1535>

著者：慶

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kohtohmookay/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99760>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99760>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ